

今日の福音書は、先週の箇所と大変関連があるように思えました。先週の福音書では、イエス様が弟子たちに「あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」という質問をして、ペトロが「あなたは、メシアです。」と答えました。マタイの福音書などを見ると、イエス様は大変ペトロの答に満足されたようで、「この岩の上にわたしの教会を建てる。」とまで言われています。しかし、その後でイエス様が、ご自分は、逮捕されて苦しめられて殺され、三日目に復活する、ということを示されると、ペトロはイエス様をいさめます。ところがイエス様はそんなペトロを叱って、「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」と言われたのでした。

ペトロがイエス様のことを「あなたは、メシアです。」と言ったのは、元々メシアが「油塗られた人」という意味で、王様とか預言者とかいう、人々の上に立つ指導者を意味していました。どちらかと言えば、イエス様を高い地位に持ち上げたい、という気持ちがあったのです。しかし、イエス様の方は、人々の苦難を背負うメシア、イザヤ書の後半などに出て来る、苦難のメシアを考えていたのです。だから、イエス様は、どちらかと言えば、社会の中で低い立場に立ちたい、という気持ちがあったのでしょうか。そして、そんな十字架を背負うイエス様にならって、みんな自分の十字架を背負ってイエス様に従いなさい、というのが先週の結論でした。

ですから、今日の福音書でも、誰がいちばん偉いか、という問題について、高い地位を目指すのではなく、低い位置であることを喜んで受け入れなさい、と言われるのです。そして、そこにいた、大人たちよりも、うんと背の低い、子どもの手を取って、「このような子供を受け入れる者が、イエス様を受け入れ、ひいては神様を受け入れることになるんだ。」と教えられているのです。このイエス様の姿勢は一貫しています。そして、そのことが、寅さんに通じるのではないかと私は思うのです。

2週間前は、42年前に亡くなった、末藤先生の話をしてしましたが、12年前、末藤先生と同じ9月15日に亡くなった、車環恵（チャ・ギョンヘ）先生のことを私は懐かしく思っています。韓国から来て、九州教区には沖縄の後で数年働いただけでしたが、私にはとても親しくしてくださったので、教役者会などで顔を合わせるのが楽しみでした。

車先生は、自己紹介をして、自分の名刺を渡す時、「私は車（くるま）です。」と言っていました。その頃、私は寅さんのことについては、あまり興味を持っていなかったのだからわかりませんが、車先生は、寅さんが好きだったのではないかと、思います。

私は時々、思い出したように、寅さんの映画を見るのですが、テーマ音楽が流れて、出演者の名前が出て来る時、ハッとしました。主演の渥美清さんが演じる寅さんの名前が「車寅次郎」なんです、その「車（くるま）」というのは、皆さんご存知のように、自動車の「車（しゃ）」という字です。

そして、車環恵司祭のことを思い出したのですが、政治学者の姜尚中（かんさんじゅん）さんによると「『車』という名字は韓国にも多い。寅さんは、在日ではないのかと思える」ということをどこかの雑誌で書いていました。

それで寅さんのことを少し調べると、8年前に亡くなった、放送作家で作詞家の永六輔さんが寅さんの映画監督山田洋次さんと対談している内容が、インターネットで紹介されていました。書かれているのをそのまま紹介すると、

永「寅さんって朝鮮人だろ？」

山田「僕は意識していた」

永「じゃあ、なんで（神戸の）長田を出る時に、寅さんに『アリラン』を歌わせなかったんだ。歌わせていれば、世界に誇れる映画になっただろう」

山田「そう。そこまでは考えていなかった」

男はつらいよの最終回は、阪神淡路大震災の翌年、寅さんが復興の始まった神戸市長田区のパン屋さんを訪ねるのが最後の場面でしたが、在日韓国人が多い長田区で、大勢の人が韓国の服装で輪になって新年の踊りを踊っているところで終わっているの、永六輔さんは、そんなコメントをしたのでしょうか。

この、全部で27年、48回まで続いた「男はつらいよ」の映画を愛する人は多くて、私が説教を学んだ青山学院の関田寛雄先生も山田洋次監督と対談しているし、米田彰男（よねだあきお）というカトリックの神父さんも『寅さんとイエス』という分厚い本をだしておられます。「寅さんとイエス」という本は、300ページ以上あって、これは勉強会で何回かやったらいいような内容ですが、一言で言うと、寅さんとイエス様は似たようなところがたくさんある、ということです。

例えば寅さんのことを、自分では「フーテンの寅」と言っていますが、国語辞典などで見ると、「フーテン」という言葉には、二つほど意味があります。①定職というほどのものを持たず、ぶらぶらしている者。②既成の社会秩序からはみ出した言動をする者を指している。ということらしい。

寅さんがフーテンなのは、映画を見ればすぐわかります。

しかし、イエス様がフーテンだと言え、皆さんは、ちょっと受け入れられないところがあるのではないかと、思います。しかし、『寅さんとイエス』という本を書いた米田先生は、元々イエス様はフーテンだったのに、聖書が編集される段階で、だんだん上品な姿に変えられてしまった、と説明します。それでも、そのフーテンの片鱗が残っているのが、例えばルカによる福音書7章33節から34節です。

『7:33 洗礼者ヨハネが来て、パンも食べずぶどう酒も飲まずにいと、あなたがたは、『あれは悪霊に取りつかれている』と言ひ、 7:34 人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言ふ。』

イエス様が大酒のみだ、という、人々の噂を例に挙げて、イエス様自ら言うので驚かれたかもしれませんが、ヨハネによる福音書の2章、カナの婚礼の時、イエス様は2～3日前に知り合ったばかりの弟子たちを大勢連れて、マリアさんが手伝いに行っている結婚式の披露宴に乗り込んだ、と想像してください。『イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。』というのは、あとから、辻褄を合わせるために編集された表現なのではないでしょうか。主催者側は十分に用意していたはずなのに、大酒のみのイエス様が仲間を引き連れてやってきて、みんなで大酒を飲むなら、お酒が足りなくなるのもわかります。

また、育ったナザレの家に、たまに帰って来るのは、寅さんがたまに葛飾柴又の団子屋に帰るのと似ていて、そのたびにひと騒動起こすので、身内の者が困るのとよく似ています。これはマルコの3章。

『3:20 イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。3:21 身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。』

このように、聖書ではだいたい本物のイエス様の姿が消えて、隠れてしまっていますが、時間があれば、「寅さんとイエス」という本を読まれたらいかがかと思います。

それで、最後に、私たち教役者が寅さんの映画を通して、改めてイエス様から学ぶこと、について、申し上げたい。米田先生は、プロローグ、つまり前書きの部分で、『一日一日をていねいに、心をこめて生きること』と言っています。しかし、これには説明がいろいろありますので、その部分を読みます。

『あのフーテンの寅さん、本当に「一日一日をていねいに」生きているのかと、首をかしげる人もいるだろう。第31作「旅と女と寅次郎」で、「明日、いそがしいんじゃないの?」と問う、さくらの息子満男に、寅は「安心しろ、他の人になくて俺にあるものと言え、暇だよ」と答える。

暇といえば、山田洋次監督との対談における関田寛雄牧師の言葉——『寅次郎サラダ記念日』で、小諸の駅でおばあちゃんに、次のバスはいつ着くのかと聞くと1時間先だと言われる。『まあいいか、俺の持っているものは暇だけだから』と答える。そして暇なら家に来ないかとおばあちゃんから誘われると、「俺はこう見えても忙しいんだ」という(笑)。楽しいですね。結局、その夜、おばあちゃんの家泊めてもらって、楽しいひと時を持ち、その(おばあちゃんの)入院のために奔走する。牧師も一人を追いかけることを、寅さんに学びます。それが羊飼いでないかと思いませんか。』に対し、山田監督が「そのためには暇でなければなりませんね。(笑)」と述べている如く、寅さんと暇とは密接に結びつく。

暇を埋めることこそ一日をていねいに生きること、と現代人は思い込んでいるが、実は暇こそ一日をていねいに生きることであるという逆説の中に、我々が見落としてきた真実が隠されている。」

ざっとこんなことが書かれていました。私は、車環恵先生が、自分のことを「車(くるま)です」と言った真意はどこにあったのか、今更聞きようがありません。

しかし、9年前、フィリピンからベルナルドという司祭が宗像に来て、数日彼と過ごしたのですが、日本の映画を見せようと思って、英語の字幕の出る「男はつらいよ」という寅さんの映画を見せると、彼は喜んでしまって、次々見せることになりました。フィリピンの司祭を夢中にさせたその魅力は、現代の私たちが、あの寅さんやイエス様の、自由人としての、暇で余裕のある生き方とか在り方の大切さにあるように思えました。おそらく、死んだ、車環恵(チャ・ギョンヘ)先生も、そんなところに魅力を感じていたのではないかと、思います。

そして、それは先週と今週の福音書を通じて、イエス様をご自分を高くするのではなく、低くして生きられたことや、『いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。』と言われたことに通じるのではないか、と思うのです。

ひとつ、最近、ある牧師から言われたんですが、「日曜日の説教を、1か月も前に作っておいて、当日説教する時に、会衆に配っておく、というのは、よっぽど暇なんだなあ。」という発言でした。

金曜日くらいまで、忙しく他の仕事に追われている人には、私のように1か月も先の説教を作っている者に対して、「お前は本当に働いているのか。」という気持ちがあるのかもしれない。

しかし、急に、それこそ緊急事態が起こった時、「明日の説教をつくっていない」などと言えるものではないでしょうし、週末ににわかになら作ったものより、3年前や6年前に書いていたものを、読み返して、わかりやすい表現にしたり、もっと身近な例を考えたりすることは、余裕のある、暇な人間でなければできないでしょうし、また聴く立場に立てば、読みやすい文章を配られていたら、耳の不自由な人のためや、教会に来ることが困難な人にも役立つだろうと思うのです。

今日の、寅さんの話で出てきた、「一日一日をていねいに、心をこめていきること」とは、隣人のために、仕えること。自分の時間を空けて、暇な生活をしていられること。そんな生き方を言うのだろうか、と思わされたことでした。